

知的障害のある生徒の主体的な学習活動への参加を促すチーム・ティーチングの検討（要旨）

発達臨床支援高度化コース

16AD106

鈴木 隆生

【指導教官】 葉石 光一 尾崎啓子 長江清和

【キーワード】 知的障害 主体性 チーム・ティーチング

1. 問題と目的

1-1 これまでの研究

筆者は、これまでに知的障害のある生徒（高等部）を対象とした学習活動の参与観察を行い、児童生徒の主体性に関わる自律性支援、有能感支援そして交流感支援といった動機づけ支援におけるT.T.の機能性に着目し、その現状と課題についての整理を行った（鈴木・葉石、2017）。その結果、生徒の主体的な学習活動への参加を促すような動機づけ支援は各要素間（自律性・有能感・交流感）の充足支援が連結・連動を、T.T.を組む教員同士で連携を行いながら組織的にこなしていく必要があるという課題が残った。

特に、知的障害特別支援学校高等部では、就労を見据えた授業を多く行う特徴上、生徒の自己決定場面を設定するよりも、与えられた課題をやり遂げることを目指した学習支援が目立つという傾向がある。そのため、課題の達成を目指しながらも自律性の充足を促せるような支援を行うために、自律性支援と課題達成のバランスを検討し、T.T.を組織する必要があると考えた。

1-2 研究の目的

本研究の目的は、知的障害のある生徒が、主体的に学習活動へと参加していくための自律性支援、有能感支援、交流感支援を基本とした教育実践上の工夫を考察することにある。また、特別支援学校では基本的にT.T.での指導が一般的である。そのため、T.T.における指導方法の中で活用されるよう検討していかなければならないと考え、本研究においては上述の茨城県教育研修センター（2000）の「単集団—複数教員（個別支援）型」に基づいて教育実践上の工夫について考察を行うことにする。

2. 方法

2-1 研究のフィールド

本研究は、A特別支援学校高等部における作業学習を対象の授業として行い、その中でも農園芸班の学習活動を中心に観察を行った。作業学習とは「作業活動を学習活動の中心にしながら、児童生徒の働く意欲を培い、将来の職業生活や社会自立に必要な事柄を総合的に学習するものである」（文部科学省、2009）。特に、農園芸の作業は、作業活動自体が高い労働性を有している（名古屋・吉岡・最上、2004）。そのため、農園芸の活動で

は、「続ける力」や「やり遂げる力」を育成するために学習課題を達成していくことが重視され、自律性支援と課題達成のバランスを検討するための対象として適していると考えた。

2-2 研究の方法

筆者は、20YY年の4月中旬から9月下旬にかけて（週二回合計24回）X特別支援学校高等部の作業学習（農園芸班）における学習活動で、参与観察を行った。授業内容は除草作業、誘引作業、苗植え、花壇清掃（花壇に入っている土を畑に運ぶ）そして畝作りであった。

観察中は、メモをとりながらT2やT3として学習活動に加わり、観察終了後にできるだけ早く詳細に起きた出来事を文字起こすフィールドノーツを作成した。最後にフィールドノーツを元に考察をすすめ、高等部特別支援学校の作業学習における課題の達成を目指しながらも自律性支援を行う方法について、T.T.による指導方法を基本として検討を行った。

3. 結果と考察

3-1 自律性支援と課題達成のバランスの検討

観察で得られたエピソードを分析し、課題達成を目指しながらも自律性支援を行う上で重要なこととして以下の要素に注目した。

- ①作業学習という特徴上の自己決定場面設定の困難さ
- ②生徒の自己決定（やりたいこと）と学習活動の目的的方向性の不一致
- ③学習活動への理解を促す認知的な支援
- ④学習活動の意図を生徒に把握させるための支援
- ⑤「称賛」と「叱責」の調和のとれた関わり

農作業という特徴上、手順やその日に行うことが決まっているため、学習活動自体での生徒の自己決定場面が設定し難い。さらに、生徒に自己決定を委ねても、学習活動の意図と方向性が一致しない場合も多く、自律性支援をさらに困難なものとしている。内在化とは、「親やおとななど、外にある価値を自分自身の価値観として内面に取り込み、それに従って自ら行動するようになっていくプロセス」（伊藤、2010）のことであるが、この価値の内在化を生徒に促すことが、教員が意図した学習活動の方向性と生徒の自己決定を一致させるために重要である。このためには、学習活動の理解を促す認知的な支援に加えて、学習活動の意図（なぜ、その活動を行うの

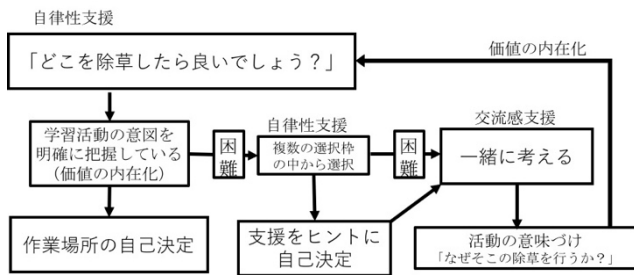


図 1：除草活動の支援プラン

か) を生徒が理解できるような支援も必要になる。これらのことを踏まえ、自律性支援を行いながらも課題達成の有能感を感じられるような授業実践上の工夫についてまとめた。特に、内容は作業学習の中でも取り分け観察場面が多い除草作業についてである (図 1)。

4.2 T.T.を活用した指導方法

大庭・葉石・八島・山本・菅野・長谷川 (2014) は、子どもが主体的に学習に取り組むために、他者との関わりを実感できる学習形態が必要不可欠だとし、小集団学習場面を活用した学習支援を実施している。小集団学習場面の全体の進行役としての MT (Main Teacher)、MT の共同支援者でありながらも、常に子どもたちと活動を共にする ST (Sub Teacher) で、小集団を組織しているが、こうした支援者の役割分担の仕方は、知的障害のある生徒の主体的な学習活動への参加を促す T.T.の検討を進める上で重要な示唆を与えるものである。そこで、大庭ら (2014) の小集団学習場面での指導形態を参考にして、図 1 の自律性支援と交流感支援を組み合わせた指導プランについての考察を行う。

図 1 で示す、自律性支援場面の課題の提示や自己選択の支援を T1 が行う。例えば作業学習の除草作業では、T1 は生徒に「どこを除草したら良いと思いますか？」といった発問や、選択枠を提示して作業場所を選ばせるような支援によって生徒自身に考えさせる役割を担う。つまり、MT としての全体の進行役の役割上存在する課題の提示に加え、自己決定場面を担当するのである。この自律性支援を踏まえて生徒は課題に取り組むが、内在化を進めるためには、なぜ、その活動をするのか考える機会が重要であり、そのために常に子どもたちと活動を共にする ST としての役割を担う T2 が個別に支援を行う。この T.T.の形態は、T2 が担当する役割の対象となる生徒には個別的な支援を行うため、茨城県教育研修センター (2000) における分類上では、単集団—複数教員 (個別支援) 型となる。また、大庭らの小集団学習における ST の役割には、生徒の協同活動者としての役割と集団の中から子どもたちの活動を積極的に支える役割が想定されているが、T2 の役割も同様に、生徒集団の中で交流感を充足するような支援を意識して生徒と一緒に活動を行うことが求められる。生徒にとっては学習活動を共にする他者として T2 が存在し、その T2 が容認

的な態度で生徒と一緒に考え、活動を行う立場をとることで、交流感支援を行いながら、生徒に学習活動の意味づけを促すことができると考えている。なお、協同とは、「共有する目標を達成するために一緒に取り組む」 (Johnson, Johnson, and Holubec, 1998) という意味で用いており、T2 が生徒にとっての協同活動者となる役割をするということは、T2 も生徒集団の中で生徒と一緒に学習活動に向かいながら支援を行うということである。

5. おわりに

本研究では、知的障害特別支援学校高等部における作業学習 (農園芸班) を参与観察し、課題達成における有能感充足支援と自己決定の感覚の充足を目指す自律性支援のバランスをとる T.T.についての検討を行なった。その結果、自律性支援に交流感支援を伴わせることで、生徒が学習活動の価値の内在化を進めていくことを促し、生徒自身が学習活動の方向性と自己決定の方向性を乖離させることなく学習活動に向かっていけるようになっていくのではないかと考えた。しかしながら、本研究は実証するには至っておらず、知的障害のある生徒を対象として本研究で検討したことを実際に検証することが課題として残っている。最後に、本研究で検討したことは、T1 を務めていた教員に伝え、現場の教員としての立場から意見を求めた。その結果、いかにして生徒の頑張りを評価するのかという「頑張りの評価について」、鎌などの農具の使用における「自己決定と安全面の配慮」、そして教育現場における「動機づけ要素 (自律性・有能感・交流感) の連結・連動の難しさ」といった意見をいただいた。

引用文献

- 茨城県教育研修センター (2000) 特殊教育におけるティーム・ティーチングの在り方 (個を生かす支援としてのティーム・ティーチング). 茨城県教育研修センター研究報告書.
- 伊藤崇達 (2010) 動機づけの内化プロセスの検証—親の自律的動機づけ及び支援のあり方に着目して—. 発達研究, 24.
- Johnson, D. W., Johnson, R. T., & Holubec, E. J. (1984) Circle of Learning: Cooperation in Classroom. 杉江修治・石田裕久・伊藤康児・伊藤篤監訳 (1998) 学習の輪 アメリカの協同学習入門. 二瓶社.
- 文部科学省 (2009) 特別支援学校幼稚部教育要領、小学部・中学部学習指導要領、高等部学習指導要領. 海文堂
- 名古屋恒彦・吉岡佐和子・最上一郎 (2004) 東北地域における知的障害養護学校での農園芸作業学習の事例的検討. 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 3, 101-110.
- 鈴木隆生・葉石光一 (2017) 知的障害のある生徒の主体的な学習活動への参加を促すティーム・ティーチングの現状と課題. 埼玉大学紀要 教育学部, 66(2), 305-318.